

氏 名	王 松 林	
学 位 の 種 類	博士（美術）	
学 位 記 番 号	博美第1号	
学位授与年月日	平成24年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
題 目	論文題目	「革紙を支持体とした、一版単色水性木版による新たな版画表現」 — 黒、白という二極の間に存在する無限の領域 —
	作品題目	「誘惑の森」「森の精霊たち」「√5の広がり—大地」「大地のリズム」 「生き物たちのかたち」1～12、その他10点
審 査 委 員	主 査 教 授 山 本 富 章 副 査 教 授 久 保 田 裕 副 査 教 授 小 林 英 樹	

1 学位論文の要旨

現在、現代における木版画の分野では多色版を主体にした版画表現や多版併用複合版が主流であり、伝統的な単色水性木版画による現代版画は、国際版画ビエンナーレや種々の版画による展覧会では希少的な存在である。わたし自身の表現としては、単色水性木版画こそ、最も自由な表現ではないかと考えている。それは摺りや彫りが非常にデリケートであり、黒白、および、それらの中間に存在する多種多様な表情の色調を出せるため、独自の表現空間を作り出すことが可能であると考えている。

日本の伝統木版技法において和紙は摺刷に最も適した素材であり、浮世絵に代表されるように日本文化の象徴でもある。木版画の支持体に紙が使われ、それが適した支持体であることは歴史が証明しているし、今後も新たな紙の可能性が追究されていくのであろう。将来においても、紙に摺った版画が主流であることは疑う余地がない。そしてわたしの将来の表現も紙と深く関わっていくであろう。

そのような前提に立った上で、遊牧民族の血を強く受け継ぐわたしは、自分に与えられた使命として、遊牧民と切り離せない関係にある革を支持体にした木版画の可能性を研究してみようと思うに至った。モンゴル文化の中で培われた日本の和紙に近い特性を持つと考えられるのが皮革であり、革紙は従来の「羊皮紙」（皮紙）より柔軟性に富み、木版画用紙の支持体として十分使用に耐えられると考えられる。革紙を支持体として版画表現に取り入れることによって、より豊かな表現を獲得することが可能になるだろうと考え、従来の紙を支持体とした版画表現の研究を中心に据えながら、同時に本格的に革紙の可能性を系統的に追究することにした。

本論文では革紙といった新たな支持体の研究に重点を置き、実験データを収集して、「革紙を支持体にした、一版単色水性木版による新たな版画表現」という研究テーマを追求しながら、その中で革紙が優れた刷摺性を有することを明らかにしていきたい。そして支持体の考察とは別に、わたしの中には生まれ育ったモンゴルの気候風土や、そこから生まれた文化が染み込んでおり、そういった伝統のようなものを生かすことが出来る単色水性木版画というものを追究して来たし、これからもそうしていきたい。このよ

うな表現は、従来の支持体にとらわれない異素材である羊革・馬革・牛革等に適した製版及び摺刷の適性度を検証・活用することにより、従来なかった創作木版画による革紙を支持体とした一版単色水性木版画の可能性を探っていきたい。

第一章では、わたし自身の芸術論を支える原点ともいえる草原、そこで経験した記憶の数々やそれらが育んでくれたものを起点にして展開される現在までの試行錯誤の足跡を振り返りながら、必然的に到達した版画表現や革紙について述べる。そして来日以来、自分の表現と和紙の関わりを述べると共に何故、革紙という新たな素材に注目したのかについて、裏付けを探りながら革紙とはどういうものであるかについて調査、分析しながら本論文で進んでいく道筋を明らかにしていく。

第二章では、抽出されたサンプルである皮革、つまり新たな支持体となる革紙におけるそれぞれの摺りや実験などを通してそれなりの可能性を探ることにした。それと同時に今まで使ってきた紙（和紙）も数種類選んで摺刷を行い、詳しく分析することにした。そして、その分析結果や実験データを比較検証し、電子顕微鏡を使い墨と革紙の相性について述べることにした。最後に締めくくりとして、多種多様な革の特徴およびその長所、短所を比較しながら、紙にはない独自の良さをはっきり示すと同時に紙に比べて劣る点等を問題として検証し、解決する方法などを述べ、自分の表現への展開の見出しを探ることにした。

第三章では、革紙の版画表現における実践作品に向けた摺刷の実験や分析等を通して見えてくる問題点を取り上げ、それらの解決方法等を記述し、そして、表現の視点から視覚的な効果や革紙上に現われる黒、白について述べることにした。

第四章では、わたしの造形作家として追究する表現世界、そこにおかれる現実と非現実、時間の流れ、自然の変動、生き物達の生と死について考え、そして黒と白二極の間に広がる表現空間へのこだわりなどを述べる。これらの表現空間を作り出す方法である彫り、摺りを伴う精神的な世界や制作に伴う革紙との対話、膠を革に戻す行為の精神性等を論述することにした。

今回の研究は、水性木版画における新たな支持体である革紙の可能性を模索したものであり、自分の表現の一部として考察したものでもある。さまざまな分析や実験を通じて一定の成果を納めることができたと思う。そして、論文のおわりの部分には、革紙の新たな表現可能性について、これからの展開について書き留めることにした。

2 学位論文審査の要旨

王松林(モンゴル名 ナ・フデ)は「革紙を支持体とした、一版単色水性木版画による新たな版画表現」を博士後期の研究テーマをかかげた。課程単位は十分な成績で取得し、2年次には、高山木版画ビエンナーレにおいてグランプリ(大賞)を受賞し創作表現について既に高い評価獲得している。

来日して取り組んだ版画表現において、モンゴル人としてのDNAの上に埋め込まれているであろう血の中にある感性が見出した素材として、皮革の可能性の探求が浮かび上

がった。電子顕微鏡を使った皮革組織の分析などを基にして、紙、なかでも和紙に替わりうるものとしての可能性の可否を探ることは、動物皮革の種類が多さゆえの複雑さがまず想定されたが、その探究心が版表現における革紙の可能性に基準となる初めてのものを示すこととなった。

複数性を前提としながらも和紙を支持体とした従来の木版表現のなかに、モノタイプ(版画でありながら1点もの)に通じている表現から生まれている数少ない作品などの先行表現の存在があった。それゆえに革紙による木版表現の可能性を追い求める動機をその感性が導いたものと考えられる。

皮との対話を繰り返しまとめ上げたものは、還元、循環するもの、内在する、埋め込まれたものとして認めざるを得ない現実。それは、食料としてある動物の肉、それを覆う皮そして流れている血液や骨などをどのように扱うのかというモンゴル人にとって重要な認識につながることであった。膠は木版画表現に欠くことが出来ない墨を生み出すために欠かすことの出来ない素材であり、それはそれら動物の皮や骨や筋などを煮詰めることにより我々人間が手にすることが出来るものであった。革紙による木版印刷の可能性を高めたものは定着剤として通常の糊の代わりに加えられる膠であり、版画としての褶刷(印刷)行為が、皮に膠を戻すということと重なり合う不思議な整合性でもあった。このことはまさに循環という我々人類に課された現代の課題にも符合するのである。

革紙を支持体とした王松林の版表現の追求は、まだ端緒についたばかりであるが、謙虚な研究者の側面としての提出論文と、緻密な創作者である王松林の表現と、研究の成果としての個展形式による研究作品の発表が示す内容は、今後の表現展開の更なる成果につながることを確信する。よって博士の学位を与えるのに十分であると結論した。